

どぶろく祭りは、市無形民俗文化財に指定されています。
ホームページアドレス <http://www.medias.ne.jp/~fzen/>



長草天神社「どぶろく祭り」 五百年間守ってきたもの

大塚 裕昌（共西町）

皆さんの中でも、長草天神社の「どぶろく祭り」を、毎年楽しみにしている方も大勢いると思います。前回の祭りと同様、飲酒運転防止のために共和駅前からシャトルバスが運行されます。さらに今回は、持ち帰り用の小さな瓶も用意されるので、家に帰ってゆっくり楽しむこともできそうです。こうした変化は、

現代の社会事情を考えると当たり前のことのように思いますが、五百年以上の歴史の中で、神社の外にどぶろくを持ち出すことを禁じていた「どぶろく祭り」にとっては、実はとても大変なことなのです。長草区長でもあり、まつり保存会会長でもある深谷善吾さんにお話をうかがいました。

どぶろく祭りは、

長草地区に古来からある前屋敷、向江、平手、五ツ屋、本郷、西山の6つの組が順番に行っています。酒造にあたる組を酒元組（さかもとぐみ）と呼んでいます。今回の酒元組は前屋敷組で、その仕事は、祭りが終わってすぐに行われる「トウワフタシの儀」という当番交代の儀式のあと

からスタートしています。最初の仕事は前の当番が作業した酒造所の後片付けや餅投げをした台を壊すことです。酒造所で作業がはじまるのは次の年の1月になってからです。それまでの約1年の間、決められた作業を、自分たちの手で行っていきます。

今回の当番の前屋敷酒元組委員長の内藤政利さんに作業日程を聞いたところ、今年の8月にどぶろくを作る桶を洗い、天日干ししたそうです。来年1月の初めには桶に巻く「コモヤシメナフ」の製作、祭りが近付くと、神社の清掃や餅まき用の餅つき（18俵も！）が予定されています。どぶろくの仕込みに入ると酒造所では温度管理の作業を一日3回、祭りまでの約1カ月間毎日続けなければならぬそうです。賑やかで楽しい「どぶろく祭り」の裏側には、こうした地元の人たちの大変な手間が隠れているのです。

でも、こんなに大変な酒元組になることを、長草の人たちは楽しみにしているのだそうです。五百年以上続いた祭りが自分たちの双肩にかかっている、というプライドもあるでしょうが、若者からお年寄りまで、皆で出てきてワイワイやりながら作業をすること自体が楽しいようです。こうした共同作業を通して、自然と

組内の団結も高くなっていくようです。

酒元組になった組は、その期間の神社の世話をし、他の行事の席順なども一番になります。こんなところにも、神社を中心にして長草が育んできたコミュニティのあり方が伺えるような気がします。

深谷区長さんは、「長草では、今でも青年団の活動もあるし、地区としての団結は強い」と言っています。だが、長草が「どぶろく祭り」と共に、五百年間守り続けてきたものは、こうした団結に基づいた、安心して生活できる環境だったのかもしれない。

ですから、シャトルバスや持ち帰りの瓶といった今回の変化も、長草地区の人たちが、これまで育んできた様々なことを考え、真剣に議論を重ねて、よつやく導き出された結論なのだと思います。

今回の「どぶろく祭り」は来年2月22日（日曜日）に行われます。内藤酒元組委員長は、「前屋敷組は人数が少ないが、その分団結も強い。他所に負けない美味いどぶろくを作ります」と、意気込みを語ってくれました。久しぶりに長草地区内の井戸水を使って作るそうです。祭りの日には、そんな大府の故郷の味を「じんわり」と味わってみましょう。